



肺炎球菌ワクチンについて

肺炎球菌は、肺炎を引き起こす細菌の一種で、お年寄りの肺炎では最も多い原因とされ、ある医療機関で60歳以上の患者さんの肺炎を調べたところ、半数近くが肺炎球菌によるものでした。肺炎球菌は、咳やくしゃみなどを通じて感染（飛沫感染）します。特に、肺炎球菌を多くもつ生後6か月から4歳までの子供と抵抗力の弱いお年寄りに感染するケースがよくあります。肺炎球菌に暴露されても、体の抵抗力が強ければ、肺炎球菌が肺に入り込むことはありません。

しかし、お年寄りや呼吸器に問題がある人などは抵抗力が弱くなっているため、カゼやインフルエンザなどをきっかけに、肺炎になりやすいのです。肺炎球菌による肺炎がほかの肺炎と異なるのは、重症化しやすいという点です。重症になると、呼吸不全を起こし、命に関わることもあります。また、最近、抗菌薬が効きにくい肺炎球菌が増えているため、治りにくくなっているという問題もあります。ペニシリン系などの抗菌薬に対して耐性をもつ肺炎球菌が増えたため、以前は内服薬で治療していた場合でも注射による治療が必要になることも多くなっています。

肺炎球菌は、現在約90種類みつかりますが、すべてが肺炎を引き起こすわけではありません。ワクチンは、肺炎球菌のうち、特に肺炎を引き起こしやすい23種類に対して抗体をつくります。ワクチンの効果を調べるために、スウェーデンで65歳以上の約26万人の人を対象に、3年間にわたって行われた大規模調査の結果があります。ワクチンを接種しなかった人に比べてワクチンを接種した人では、肺炎球菌感染症によって重症化した人や、肺炎で死亡した人は半数以下になっています。

しかし、日本ではまだ、予防のためのワクチン接種の重要性が、あまり、認知されていません。日本国内で肺炎球菌ワクチンの接種を受けた人は、1998年ではわずか2000人程度でした。それが、2001年には10倍の約2万人に増え、さらに2002年には約15万4000人と急速に増加しています。

このように、一般の人にも医療従事者にもワクチンの重要性が徐々に認識されてきてはいますが、お年寄りの接種率が約50%のアメリカに対し、日本ではまだ1%弱にしか過ぎません。65歳以上の人や、腎臓病や糖尿病がある人は、病気に対する抵抗力が弱くなっていますし、慢性的な肺の病気をもつ人は、肺炎が命に関わる危険が大きくなります。また、脾臓を摘出すると、肺炎球菌に感染しやすくなることがわかっています（脾臓を摘出した人のワクチン接種は、健康保険が適用されません）。

これらの人は、ワクチンを接種して肺炎を予防することを担当医などに相談してみるとよいでしょう。肺炎球菌ワクチンの効果は、5～8年ほど持続するといわれています。そのためアメリカでは、1回受けた後、65歳以上になってからもう一回受ける2回接種が認められています。しかし、残念ながら日本では、一回しか接種が認められていません。そのため、接種時期についても担当医とよく相談しましょう。副作用に関しては、ワクチン接種後、注射を打った部分が赤くなったり、少し痛みが出ることはありますが、2～3日で治まります。日本では、現在のところ、ワクチンの重い副作用は報告されていません。ただし、ワクチン接種はあくまで病気予防ですので、その適応、実施に関しては、担当医とよく相談して判断してください。

【広報おかや8月1日号掲載】